

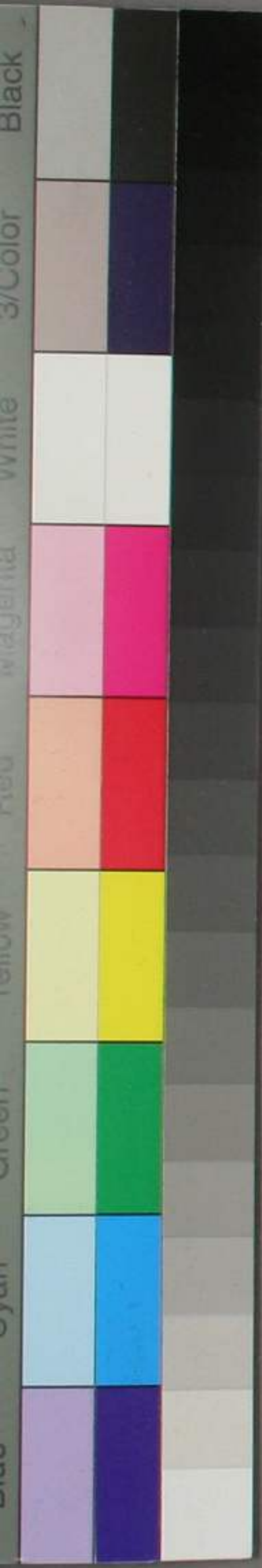
朝鮮通交大紀

二

リ 5

4978

2



U 5
號 4978
卷 2

九卷
號 1274
卷 2



朝鮮

通文大紀卷之二 目録 曾全安國の書

龍源院公次

一 永正七庚午年三浦之乱有りし事

附 此の時我州宗能登盛弘をして三百余人を率ひ

て朝鮮を伐しめらきし事并彼國此之事居倭

のやへとのいひて我州兵を渡さしめし故始終間々

たりり如く為し之の書附此の乱出来し由緒之事何

きも論じて愚按有り

一同八辛未年 公義植の公方へ此事を訴へ曾弼中

一 をして國書をもたうして和を請ふたりし之事附
我州將士の首級を送りて此より謝を致さむたりし
の事

一 右一件よりて恭僖王我々義植の公方に復せらむ
し書有りし事

一 壬申約條之事附此之時よりして三浦居倭を禁して
館所をのみ齋浦に設たりし之事

東泉寺公

一 此之比賊倭の事によりて禮曹金安國の書有りし事

事

一 同約條之事によりて禮曹金安國の書有りし之事

西福寺公

一 天文拾年辛丑此之比賊倭之事有りしによりて彼國
盡く在館倭を我州に還せし事 公罪倭を
捕へ送らきし之事附 宗氏譜に我人の齋浦に
居る者三百人逐而とある之事

一 右一件よりて禮曹金安國の書有りし事

一 此之比賊倭之事によりて禮曹金安國の書有り

一の事

一同十一壬寅年三浦倭戸の事舟人之點檢せ傳む
るの事其請あらきしによりて禮曹金安國書を復
せし之事

一同十三甲辰年彼の國濟浦の館所を釜山浦へ
移せし之事附此之年賊倭之變有りしと見へし之事

長壽院公

一此の時歳遣増して三十船に至りし之事
附此の比袖谷盛廣をして往て彼の國に説しめて歳

船五十の旧額に復せしと傳ふが論せし之事愚按有り

山静院公

一永録十丁卯年恭憲王我り義榮の公方不復
せらまき書ありし之事

一此の比昭敬王同トキ公方不復せらまき書有りし之事
但此時よりして船の大小尺量改傳めら見たりし之事

萬松院公 昭景

一天正九年乙年昭敬王我り義昭の公方不復せ
らまき書ありし之事

但 貢路之事を朝鮮に告らきし之事此の時に見し
の事

一 同年昭教王同しき公方に復せらきし書有りし
の事

一 附受職人之事并古來國王使來歴の事何まじ
の事

一 愚按有りし
一 未詳ナリ
一 未詳ナリ

朝鮮通文大紀卷之二

龍源院公次

永正七年庚午同しき公方明の正徳五年此三年三浦之
乱有り此より先き我州之奸民潜ニ船夫或ハ漁採人杯ニ
混シて彼之國に至リ三浦之居倭と同しく謀りて夜に乗
リ邊浦ヲ掠メ人民ヲ殺シ財貨ヲ奪ヒ或ハ潜商
奸淫志きりに其之凶惡ヲ而しひまにしたりし由一彼
の國度ニ此の事を我々州に告たりしに如何成子細亦見し

に也我州嚴しく此も我處治ある事もありしに
彼三國甚だ此も我憤りあり此事我輿地勝覽に記
して言へらく時釜山僉使李友曾威を名つて此もを制
せむとして濠りに留傳を鞭撻せしによりて釜山の倭人怒
を積り齋浦の居倭と同一く謀り夜に乗じ釜山城を
陥しいそ僉使李友曾を殺し又能川城を陥し其を
おひて防禦使柳聃年黃衡をして此もを討む齋浦の
居倭此の變を聞き盡く本島に入還ると見へたり此の乱を
彼の國の書に三浦の乱浦たに庚午の變と言ひし也

、按三宗氏家譜に記して此年春大内義興國王使に准し
大船を朝鮮に遣し且我州之文引を受たりしや一彼國
其の接待之事を難まひし其使大内此も鎮西
の都督也何そ必し文引を對馬に受らむやと言ひて
争ひ止まらりしや一彼國止事無く接待しぬ其後我州
歲船の至るに及びて大内ニ規外之大船を遣し且其の
文引無りし事偏に我州の爲る所宜しからずといひ
て我り歲船接待の事我許さるしを 龍源院公大
に怒らむ此事四月四日或ひは云く三月廿三日伯父宗

能登盛弘をして宗彦摩宗式部宗織部宗彦右衛門
宗伊豆宗興三兵衛宗大膳系瀬播磨吉藤源左衛門
野瀬藤兵衛細代彦右衛門嶋屋隱岐阿比留藤七郎依
佐渡森戸勤解由郷塚平内袖谷伊豆津原右衛門
立石弥右衛門中村十郎長田孫左衛門久和浦吉藏清水
與六曰祇伊豫梅野内膳串崎小左衛門大浦圖書嶋
居弥五郎古川近九郎古茂新兵衛小田兵庫佐渡甚
左衛門平田彦右衛門赤木徳左衛門内山清右衛門代木平七郎
樋口藤藏廣田源六藤兵内岩崎甚七左衛門川野甚兵衛

畑島式部三牧野浦權四郎中里左衛門佐伯興兵衛河野某
按朝鮮國王之書ニ盛親と有り
河野平左衛門盛親之事也 上野某等凡三百余人をひ
きひ朝鮮に至り我人の三浦に居る者と同しく熊川等
の鎮を撃ち愈使李友曾を殺す爰に於いて彼等
防禦使柳駒年黃衝を以て此を防りしむ盛
弘其敵を逐ふべきを悟り余瀬播磨を以て廿
三人を領し我州に歸り此事を報せしめ此月十
九日進みて駒年等と熊川の地を戦ふ盛弘從兵と皆
此處に死すと見たり此兩説以り是たるを詳し

為に云へとも其一時の形勢を以て此事を料り獨り
大内船の事により此大變に至る處きに有らば此事
後より愚按有り

按二庚午の變之事彼國の書に釜山蔚浦の居倭
亂を興し熊川釜山を隔つて時塩浦之居倭此之
變を聞き本島に逃げ歸りに本島速に此を
城執一送る事無く朝命に逆ひしを以て此事と
好みを絶とのみいひて一語の此時我々州兵を遣ら
せしと云ふ時に我々州より彼の國を撃たせしと言ふの

義に至る也然る時彼國再び我々州と通文するをその道
絶つぬを以て然ると又終に我々州と通文を絶つる事難
きを以て此の事専ら三浦居倭のする所ありとのこ
いひて此時我々州兵を遣らざし事全く彼の國
聞らざる如く取扱ひあり此を以て後萬曆四十年禮
曹各議尹暉萬松院公呈せし書に庚午三
浦作亂倭奴逃竄而本島藏匿累違朝廷之
命絶和有年彌中上人再三往返後朝廷始
許舊好と有り又此意也

此におりて我州朝鮮通文の事絶たり翌永正八年辛未明之正徳六年 公其事を公方義植一訴一僧彌中をして 按二日本傳三彌中ハ東海碩断禪師の上是ニして道徳禪師と稱せしと見たり 國書をもちらへ彼の國に使し専ら我州通文之事を求めらるるに朝鮮恭僖王各ふるよ若く對馬に命し其の逆徒を誅し其首級を送り深く其罪を悔しめ宜く此を計るるいと云ふを以てせしむ其比 東泉寺公未だ十一歳ありしに封を襲せしむるに且此一亂の事我州全く忘れぬの事ありし趣に

其逆徒の首也として首級を函より送り 東泉寺公深く其事を謝せらるる也又公方より再び彌中を使として此子細を彼の國へ告らるるに彼の國漸く我州通文之事をやさしあり 此之時歲遣五十減して廿五船と一又特送を傳め且三浦倭戸を林赤一館所を齋浦ニ設て我國使臣上京來往接待の所と為しあり又此歲賜米定二百石を減半し及び我州受職人の番書船を傳めたり 按三庚午の變の事其亂有りし子細を思ふに大抵

我々州人彼國三浦に寄居せし其言語風習之同し
からざるを以て彼を是を視る事異物の如く
少くも安むし惠おの心無く出人來往に至るまで
其界限を立て是を待の事甚だ刻薄ありし故
我々人其憤りに絶ざるの餘りみたりし果限を越へ
人の婦女に奸淫し或は潜商又ハ人を殺し財物を奪
ひ去る者ありしを彼の國此を待のの刻薄ありし
によつてふくの如しと思ふ事ふく一向禽獸の思
義を知らざる如しとして濫りに鞭撻し威を以

て是を制せむと爲し我々人更に憤りを懷き
又我州此之事を聞き安んじにおもひしは彼之國
却り我々州之爲るとおもふ當らざるとのみおもひしは
自下我々使を禮遇し元我々州を待の事に至
つて何きと踈略の事多かりぬなり又我々州彼之
國之風習時變にうとくははとあく彼此之情違
却たりしより終に此大變にまゝありしありし
此時朝鮮恭僖王我々義植の公方に復せらるる
書有り仍而再び通好有りし次第を考へ見ゆ

左りに記す

復日本國王書

海道險遠再辱聘問副以腆貺千萬感荷况為
弊邦命對馬誅討逆党函首以送尤見貴國交
隣信義之篤采增銘佩又至許和之請豈不欲
後但對馬島負我累世卵育之恩敢逞兇逆其
極惡大罪莫容於覆載之間不亟加之天討為
幸大矣矧敢望其和乎特緣去歲貴國專使來
請義不得固拒故復之以對馬若能甘心服罪

盡誅逆徒函首未獻則當更商量言者蓋為貴
國詭勅不得已而為此語耳初非欲輕賞對馬
也貴國即因弊邑之言旋下嚴命誅討亂逆以
彰大義貴國之舉不亦善乎為對馬者固當感
幸弊邦之命畏懼貴國之威宰一島之衆盡捕
逆類寘于顯戮縛其渠魁致諸轄門之下使中
前日死亂者之父兄子弟甘心為康可下暴
其初不與知之心也顧乃不然承貴國之命勢
不得違逆雖強勉斬首而未當叛亂之時搃首

將通書契如盛親者猶為代官偃然僞書以隨
以此觀之所獻之首安可信其真魁惡也且其
時亂興不意我赤子之無辜者固多被其淫害
為所擄去亦宜不少而今無一人遣還者島主
服罪輸誠之意於何見乎况盛親雖自訟無罪
乃不躬來自明使舉國快知其黷昧無實之情
而顧因一紙之書飾枝蔓之辭欲我國不已疑
不亦慢乎然則其實有罪無罪亦果何由而知
之乎貴國之為幣邑無不盡心而對馬實負責

國之命狡詐難信如此今縱不許其和非我孤
貴國之請也良由對馬不奉順貴國之命之罪
耳弊邦之所患唯患不得與貴國盡友好之道
而已若茲小島加之不信雖永絕之固無不可
弊邦臣庶獻議于朝爭執于廷者舉請寡人勿
聽其和不至此隸卒伍之賤亦皆不願復通寡
人不能違國衆之心而獨行之但念弊邦與貴
國自在先祖世篤隣好今為此一事再勞使使
遼涉風濤請之勤懇厚意難拒姑勉從之然其

對馬辜恩肆免之罪不可全釋待之之事則當
裁減於舊嗚呼寡人以貴國之故復通小醜使
我一國臣庶小大咎予咸謂失舉寡人實涼于
德不能綏服遠人致播兇逆禍我邊圉寡人深
愧德之不脩不得如虞朝之格頑苗寧暇為耀
武討罪之計哉雖然我亦予之陷于彼者寧忍
棄之盛親之党惡與否又豈可含糊不終辨問
予縱使盛親非已所犯身為一島代官管一島
之事而被人偷印圖書假其名字叛亂于我邊

亦不得為無深也貴國必皆有以處之島主又
豈不為之計哉予既已許其和矣從今以往除
觀島主所為可察知其革心歸化之誠不誠耳
不腆土宜具載別幅親重報畧祗懷慙靦寒候
漸通冀益保重不宣

和文

再び轉問を辱ふはゆ、弊邦の爲に對馬に命を送るに
誅し其首を返す、以て送らむ貴國信義の篤き誠に
感荷に絶て對馬の爲に和を求むる事に至りて其請

しに從らばざるを許さず但對馬の島我々累世之大恩に背
き極大罪天地の間に容れず死無し此に天罰を加へざる
此を幸に存せし又敢て其和を望まむ去歲貴國使
をして専ら來り請ふに於て答ふるに對馬若し心を革
め罪に服し盡く逆徒を誅し其首を函より來り獻せし
更に議を論じしと言ふの貴國のためにも事無く姑く
語を致すのみ初より輕く對馬の罪を赦さざらば貴
國よめて嚴命を下し其逆党を誅せしめ以て大義を
あぶらば貴國の存す所かくの如く至まり唯對馬弊邦之

命を感幸し貴國の威を畏じ一島此衆を収め盡く逆類
を捕へ此を我々大戮し置き其渠魁を縛り我々軍門の下に
送り其亂を死せし者の父兄弟をして心に從ひ怨を報
せしめ希し其初より逆惡し人みせざるの意を明らむるし
然るに今貴國の命に仍ち止事無く首を斬て以て來ると言へ
ども其叛亂之時に當て首將と稱し書契を通じたりし
感親ら如き猶我々代官として其書をもたらし以て來ら
しむ此に於て此を見たり其獻せし處の首如何に
其真の魁惡あるを知らむ且其時我々民の擄り去らざる

者の思ふより少からざるを、然も今一人の遣り還に於て島主
罪を服し誠を以てたの實何よりよめて、此を見む且盛
親其罪無きを許といへども彼は自ら未り明らか事
無し後又一紙の書によつて其辭を明かり以て我國
の此を疑り、さうむ事を求むるもや貴國幣邑
の爲め、心を盡さるといふ無くして對馬のする處信し
かたき此に至る今たとひ此を和を許す事なくとも
我ら國貴國の請に背くにあらずして實に對馬貴
國の命を用ひざるの罪よりのみ弊邦に有て貴國と

好地盡く在事不能さるをうきふのみ此小島の如き永
く此を絶とす不可ある者無し契邦の臣庶其の賤し
杞に至るまで皆再ひ此を通過する事を祈るを以て寡人
一國の志に違ひ獨り此を和を致す事あたらず但
思ふ兩國先祖に有りてあり此のたせ隣好を篤くす今再
ひ使价を勞し遠く風濤を渡り此を代請ふを以て姑く
勤て此を従ふのみ然も對馬恩に背れ惡を肆怖りに
すこの罪盡く赦を乞ふ此を代接待するの事に至
て、舊例を裁減せざる事あたらずのみ夫我ら民の

彼もに陥し、いさるる。その此きとすんるに思は盛親の
 悪に覺た。終り此きと究めたるをいふも、いふ盛親
 をして實にをたまりたる處あらさうしむとも身一島
 の代官として一島の事を管し人の爲めに其圖書を
 偷まき其名字と似り我り邊を亂る事を致さしむ
 又罪ありと言うらば、按三盛親の川より許して先き三浦の處の
 時盛親を稱し信人を將ひたり、いふのきり爲は
 處にあり其時他人盛親の圖書を偷し書契を偽り作り其名字と借り
 し者也自ら將たり、いふと云ひしありなり
 責國必死此に處たる事ありむ島主にあつて又
 此より罪を紅毛事無りたるむや今既に此きに和

を許し、い更に島主の爲る處を見て其心を改め他に歸志
 するの誠不誠を察するべきの事不宣

壬申約條改事撮要に見ゆ左に記す

對馬島 歲賜米豆共二百石 正徳七年約條
 時減一百石 其受岡書受職人等五
 不接

島主宗盛長 歲遣二十五隻 自宗慶以下世爲
 島主至正統八年
 宗貞盛爲島主 本國約 歲遣五十隻 船
 正徳七年約 條 爲 二十 五 隻 船
 内大船九隻 每十一名 中船八隻 每十一名 小船八
 隻 每十一名
 二十石

島主特送船正德七年約條時減若有

宗能滿歲遣三船宗能滿島主之

宗盛氏一船宗盛氏島主之姪也

受職人一人一船〇歲遣一人

第十四代東泉寺公諱八盛長佐渡守と稱し候御時

同し御宇同し公方明之正德年中朝鮮恭僖王之時

に當り此比全安國我州に送るの書有り左記在

通諭對馬島主書

書來就認雅履清迪開慰所獻禮物轉啓收了

將土宜正布二匹付回使惟領留所索白綿布

前來乃而浦第六船而知汝文賣去惟照諒通

者足下洗心滌慮悔禍圖新謹奉約束歲遣禮

使貢誠于朝深用嘉歎謂自今役益虔忠順之

節永無拂戾違悖之事不意貴島管下賊倭三

艘竊入全羅道境楸子島近處於去閏四月初

五日昏夜乘其不備共劫本國商船五隻殺害

人命盡掠載物件而去聞之不勝駭愕此雖非

足下所知足下平日苟能盡心效忠痛哉群下

勿_レ得_レ恣出_レ少有所_レ犯嚴加誅罪誠信積孚威令
素行則安有_レ如此之事乎縱_レ下逞惡致_レ犯_レ我邊
誰任其咎足下向國誠款之實果安在哉所_レ為
若_レ此而望_レ國家恩待之厚乎致_レ足下忠績虧缺
誠悃未_レ白皆由_レ此奸慝之輩足下宜_レ急下_レ令管
內務得_レ捕獲_レ寘_レ之明刑以暴_レ足下藩_レ衛_レ國家之
素心不_レ勝_レ幸甚繼_レ今以往申_レ勅_レ一_レ島嚴加檢覈
毋_レ得_レ縱_レ惡以克_レ終_レ恪_レ順_レ之美毋_レ孤_レ國家棄_レ瑕_レ優
撫_レ之恩

和文

足下禍を悔ひ謹むて法度に從ひ歳々と禮使を遣
る朝廷深く此を嘉す今より益忠順を勤め永く
違悖の事あらむと思ふより貴島の賊倭三艘閏四月
初五日全羅道に入り商船五艘を劫り人命を害し物
件を掠む此きを聞て駭然たり此を足下の知る處にあ
らばと言といと厳敷其下を治め其を正して我邊を
犯さしむ足下國に向ふの誠以てわらわらありあそとす也宜
しく速に令を下し此輩を捕へ此を我嚴刑に置き

國に藩屏たるの誠をあらわし以て我々國家舊惡を
捨るの恩に背く事あらざ

答對馬島主書

因使价就認迪吉開慰且承辱書具悉足下滌
心改慮輸誠效欵感國家之恩俟申謝之禮敬
順慙惻之意溢於言表深可嘉尚即已轉達冕
旒但約束之事當初許和之日朝廷已商議酌
定理難更變前此已再通書詳諭足下想亦悉
矣不復觀縷足下試思前日之所為果何如也

而國家猶盡棄前愆許其自新又時賜恩例之
半俾不失先世之緒足下寧不感激思所以盡
其心乎為足下計固當一遵國家約束奉承無
違益勵內向之誠久著忠勤之績則褒嘉之典
國家自應舉之足下不此之勉而連遣違約之
使強聒不已致足下敬順之誠反似拂戾之跡
未知足下之意何在唯足下更加商量與島中
老成賢知之人熟計利害而審處之以收後日
之福不勝幸甚所獻禮物轉啓收了今將回賜

某物給付來使惟領納餘莫若時珍重不宣

和文

足下心我改必慮を易く國家の恩を感し申謝の禮を候
む深く嘉歎を候但約束の事當初和を許に時に朝廷既
に宜記し隨ひ此を議定せり理にあつて又變じかた
く先記既し再び書以通し詳に此を我諭しぬ國家
悉く其薦惡を棄て其自より新に候るを許し又
殊に舊例之半を賜ひ以て先世の緒を失ひしむ足下
益此を我奉承して違ふ事無く久しく忠勤の誠を致し

ハ國家自より褒嘉の事有らんは我連りに約に違ふの使
我遣し請ひ求るのやあはとあくの爲りて其敬順之誠無き
に似たる事を致さば足下宜しく更に慮りを易く能く此
を以て處し以て他日の福を以たさば幸甚

第十六代 西福寺公諱ハ晴康讚岐守と稱し假御時
後奈良院御宇万松院義晴の公方天文十年辛丑
明の嘉靖二十年朝鮮恭僖王三十六年此年七
月宗氏家譜に我人居齋浦者三百人與彼人
爭鬪見逐と見えたり

按此時我州人齋浦に居るもの寇賊
を去りて彼の國其之在館の倭人を以て

悉く我州に送り我正して其賊倭を捕へ彼の國に致さしむがよめて
此書を究向し罪倭を捕へ送りまきし事金安國之書に見ゆ宗氏家譜
の記を所思ふに此事を以てしるるなり
其此書後に見たり

此比金安國我州に送りし書二本有り左に記す

對馬島通諭書契

書來就認典吉良慰良慰所獻禮物轉啓收了
將土宜棗布幾匹并給賜虎皮一張付面使惟
領留書中所示歲賜米豆等事約條久定轉啓
為難惟足下祇順朝命益勉忠績則豈無恩獎
之時乎五島倭人雖無文引救恤漁民而至義

不可拒不得已姑待之後若無文引而來則嚴
絕不納之意前已詳復因倭之事前亦復之而
來書再及豈足下猶未釋然於中耶何言之重
複而不置耶雖然今聞來使之言因倭之事邊
將則固無干涉矣意或村里之間潛相來往容
有被害之虞冒禁潛行雖其自取然人命所關
將欲竊極緝問苟得其跡自當究治但觀足下
書辭多慢之婉順之意有乖敬上之体無乃足
下有異意欲得釁端假此數事而為辭乎堂々

大朝武威非不足也惟以禮義德化為重恤隣
撫小務盡誠厚然倘有犯分梗化之事則自有
公法天討不得不舉也忠順則獲福悖慢則禍
至雖愚人皆知以足下之智而豈不及此乎且
夫足下忠績之實於何驗之唯在夫恪承朝命
一意遵奉懲戒奸竊清帖海徼刷護漂氓活命
復業檢勅使价無敢違禁而已凡此數事皆足
下之常所盡心者然奉足下之命而來使者不
体足下忠順之意不念國家綏撫之恩館待錄

饋之厚又不念往日奸恣致禍之由包荒寬大
之德而類不檢下無賴奸頑之徒多充格倭尚
乘其還也皆潛留不隨積以歲月有若素居前
後無慮三十餘輩相與結党朋惡厭其拘閉不
與客館諸倭共處尋常隱伏林谷有如鬼域盡
乘輕舫托稱漁釣橫行浦島逢人則劫或殺或
掠夜越垣籬出入里落密約奸商潛相貨質奸
淫鬪鬪無所不至我國之人苟或禁之則抽劍
欲刺逞其暴克此等情跡有難枚狀凡諸禁約

大法無不冒犯以累足下喪天致忠之節其中最恣橫無忌縱惡不已者迎時羅等十三人也誠慮不早禁治益至滋蔓則兩間之禍自此作矣邊臣守將不勝憤疾交章請誅我主上至仁天覆且以足下効節之故不忍遽從特命先諭足下使之嚴究寘罪足下猶不能禁則國家自有以處之而不容貸也惟足下暢承朝命劃即出令一一推鞠自今若此奸縱之類勿復出送嚴示法禁一以杜後來奸亂之釁一以効足下

忠恪之績則國家豈無嘉獎之命乎足下其審處之但計奸頑之人侮法無忌好亂樂禍乃其素性足下雖嚴治之又禁出送彼將百計伺隙潛圖復來足下亦將不能一一致察矣若迎時羅等輩久住浦而其名與形貌本處將卒無不詳知貴島使船九至浦所者同舟之人當先點檢苟有將前項奸類一名偕來者則同乘諸倭並不許接事約令已定矣足下亦悉此意通諭管下嚴加檢戢幸甚且貴島之於我邊雖曰溟

海之隔煙火可望朝發夕至近來使船之至者
其文引日月則或隔七八月之久豈無所以慮
或有奸欺之事亦望足下致察而謹處之唯務
誠實以無虧事上之度幸甚餘冀順序珍重不
宣

和文

示下之處歲賜米豆等之事約條久しく定まりて
轉啓を以てしつたたく足下朝命を祇に益忠勤を勤
め自ら恩賜の事有らんのみ五島之倭人深民を救

て以て至る義たおいて拒むたし仍而文引無しといふと姑く

此を納またり今より後凡そ文引無きの船嚴敷絶て

納まざるをこの意及因倭の事先き既に詳りに復しぬ

如何そ此を言ひてなまらぬや因倭の事

邊將之預り知る所にあらず思ふに村屋の間潜に相往

來しておつて害を被むるあらん彼も自ら禁を犯し

潜行し以て爰に至るといふと人命のあつて処宜しく此

きを究治するも但足下之書順承之意少く上代教を

るの体に背むなり足下或は別に思ふ處有りて此數事を

按此の因倭の事今考ふるに

假り以て事端と爲るる我々大國武威足らざるにあらず唯禮義
徳化を以て隣を恤し小を撫て務て仁厚の道を盡すの
み然るも其の分を犯し徳に背くに至りては自かた公法有り
天討を加ふる事あたらず是下之智を以て思ふに爰に
至らざる且朝命を恪し奸惡を治め漂民を刷還し及
使价に令して以て國禁に違ふ事無かりしむ等之事
此見皆是下之心を盡くすむき處ありたりも其來り使
者もこの是下忠順之心を体し我々館待の恩を感し
又我々國寛大之徳を思ふ事無く常に其下人を治

めたる其きとて肆たりしか又彼の奸惡の徒多く格侮として
來る潜に留り居る者前後三十餘輩仍而党を結ひ且
館に居る事を厭ひ常に林谷に隱り伏し或は魚釣に托
し浦島に横行し人を殺し掠め或は夜に乘り垣籬を越
し潜に相貿易し奸淫争鬪至るる處無し我々國人此を
を禁せむと爲る時ハ劍を抽て刺むとす其暴惡を而し
以はるに及らぬ事察て數ふるを以て迎時羅等
十三人尤惡を懲りて怒る事無き者也若し早く禁
治せむと怒るハ兩間の禍此きよりして始まらば邊臣守

將其憤りに堪へた常に此きり誅を請ふと言へども但是下
忠誠之やを以て我主上其請ふ所に従ふに忍成仍而
是下に諭し嚴しく此きを治めむ是下も此きを禁むる
事あたはずむい國家自ら此きに處るの道有り福有り
くは是下速に此きを令を出し一々に究問し如此の奸類再び
出で送る事あるを志りしはたふ彼の奸惡の徒法を悔り亂を
好む此き其習あり是下たとて嚴しく此きを治め又出で送
る事を禁むと言ふはあた忍くは百計して潜に又來らむ
事を迎時羅奪りこと久しく浦所に住し其の名あり

形負我々人詳に此きと知り元此後貴島の船我々浦所
に至る宜しく其きとて先づ自から其同船の人を改めし
むむしむし右の奸類一名と同しく來らむは其一船に
諸倭を以て接待を許さるの事既に其令と立てたり是下
宜しく此の意を曉し其衆に通諭し嚴しく此きを治め
ハ幸甚貴島の我々國における滄海の隔ありといふと
朝に發り夕に至る近來使船の來る其文引を考ふる
に或ハ七八月の久しきを隔たりおむふに奸偽の事有
らん是下又細りに此きを察を以たり誠實を務て上に

得るふまの道と失ふ事ありき

與對馬島主書

炎涼之交不審動履何如前者第一船主回還
賚去書已達矣齋浦留倭橫恣之狀與夫處置
之意備載書中皆稟自上命想足下悚然敬承
商出措處之令矣治惡於未稔過亂於未作使
彼此兩和而無釁疆圉平安而無虞固王政之
大慮其先事而為之固以處置此輩特朝廷一
錦令之餘邊將一震威之間耳所以必付足下

治之者蓋欲使檢載之威全出於足下俾管下
之衆畏懼足下之嚴令而不敢復有所犯也國
家所以恩護足下令不虧忠順之績之意至矣
但不審足下得書之後果何以處之乎而留館
光頑不逞之徒非不聞知通書貴島之故而猶
不悔戢久益肆橫邇間兩度之犯俱係兇殺寇
亂疊發於旬月之中尤為駭愕耳不忍聞一則
數十成群乘夜踰越墻限刺殺官兵三人一則
潛乘昏暗成群騎使中船掩襲邊官因事往來

之舩於薺浦相近之處害死人命數至三十殺
人者死寇亂必誅古今天下大法法之所犯無
間國之彼此化之內外理不容貸苟或容奸不
致於辟則死者含冤於冥冥之中天地鬼神必
加殃禍於弛法之人矣邊得具由馳啓請加殲
殄國家以謂此非盡舉館之後所為蓋出於其
中最穢惡之後今若不辨而并誅則非王者至
仁之政特遣近臣馳往浦所欲究正犯之徒而
抵罪留館舩主十餘人等非不知犯人之為誰

而竟隱諱不告其容奸黨惡之罪亦所當治邊
臣猛將益用憤激請殲不已主上復以為犯人
則已矣不告之罪雖黨惡自與犯人有間豈宜
淫刑縱誅以致玉石俱焚之濫乎乃命廷臣議
之皆謂不論罪之輕重一切誅討固非仁政然
殺人寇亂之臣不可不究極而致辟在館之後
既不搆告無從鞠辨彼既黨惡不首罪亦重矣
兩犯之時凡在館者不給留浦過海之糧不復
接待盡令人送本土通諭島主島主苟能嚴鞠

作變之時同館之倭捕獲而度正犯之徒倭使
押送顯戮於境上以正天誅則宜如奉命討罪
之忠績優示獎典撫綏如舊矣島主自先代世
輸忠款管下之人苟有寇犯之罪則常承我國
之命盡心誅禁曩者雖有庚午之變厥後感國
家棄罪還待如天之恩悔驚自新效順益虔在
今島主鈞忠彌篤今聞茲變且承國家嚴諭豈
不惕然興懼罄誠推鞠期得罪人以獻乎即今
東京倭使不于浦所之犯請命禮曹為書付送

今諭島試觀處置之如何果能捕告犯人則依
向議施行如或依違不即捕告則非徒責島之
船雖深處信使之舡請一切永不接待我非絕
之彼自絕之也尚誰咎乎廷議如是主上不得
不從然不許邊將誅討之請苦命開諭臣下審
而處之其委曲加恩涵洪施仁至矣貴島之中
豈無通利害度義理老成智計之人乎足下其
共商議而行毋貽後悔以不失寵綏之福餘冀
以時千萬自重

和文

され第一船主もたらし去るの書齋浦奸倭の事及其處置
の意具に書中に載る此皆上命より承たり此等々の事
朝廷にたとひ馳令し邊將少々に威を振ふの間に過ら
らも必死に足下を治めしむる者蓋し其威として全足
下より出ぬ其衆をして足下の令を畏き敢て又犯す事あた
いさしめむと欲はるり之のこ此國家足下を愛護し其忠
順の務を失ふにさうしむるの意至たまりといひしむる但足
下此きに處たり如何と言ふを知らざるのこ晉館の奸倭我

國先書を貴島に通し此事を告しを聞りしにありし志のこ
猶益肆也此比兩度の亂旬月の内に發る尤驚るしと
一とたひハ敷十群をた一夜に乘し墻限を越へ官兵三人を
刺殺し一度ハ中船に騎り昏夜邊官公事を以て來往
るの船を齋浦相近きの所に籠む人命を害する三十
の多きに至り夫を人を殺すハ必死し寇賊ハ必死誅
是古今の大法あり仍而邊將此を以て馳啓し悉く此を誅
せむ事を請ふ國家おそらく此を在館倭の悉く預り知
所に有る其内最とハ奸惡あるの爲る處あり今此を

を分つ事なく總て誅するは王者至仁の心に非を仍而近
官をして浦前に馳せり其犯人を究めしむ晋館の鑿主
十餘人其犯人の誰ぞと云を志らざるに非を然るも隠し
諱むて此を告る事あり其惡に党するの罪又治む
るべき所ありを以て邊臣猛將益此を憤まり
主上又おまらなく其奸を党するの罪誠に惡むを
言へども此を以て犯人より比を時、又少く異を有り
又一際にして此を議せしむ皆おまらなく一切に此を
以て誅する誠に仁政に有る然るも人を殺し寇するの賊又

戮せむいあるを知らず在館の侮既に此を以て告に以て
究問し其兩度寇亂の時館に居る處の侮人其浦所滞
留及過海の料一槩此を以て給する事無く且人をして總
て存土に送り歸し此を以て島主に通諭する島主も
し能く此を究問し其犯人を捕へ使をして送り出た
此を以て境上に戲し以て天誅を正しくせし其國命を奉
罪を討たるの志を以て厚く此を褒へ其を以て待事舊
の如く在る島主先代より久しく忠を致し先き庚午の
變有りと言へども其後國家其罪を免し再び接待する

の恩に感し自から悔ひ自より新たに忠順を致して益
慎む今此島主に至りて忠を納む事尤篤し今此變を
聞き又國家の嚴命を承らば其誠を盡し拷問し罪人を
捕へ以て獻せざる事有んや今來りて京より有るの倭使に
致して既に浦所の寇にあつたに宜しく禮曹をして
書を島主に送り彼を以てきたらば歸らば誠を島
主の所置いりむと察し遅延し捕へ告る事あるむ
本土におくり歸るところの倭人此後對馬の船を論せし辱
ひ信使の船に隱し居ると言ふと一切永く絶て此を

接待せさらむ廷議如此し其の恩を加へ仁を施すの意
を倭に宣ふ速に此を施行し以て後悔を致さず事ある
るべし

按書内齋浦館倭處置の事を我國武威足らざる
に有らば然らば必に足下をして治めしむるべし蓋其令
を畏し敬而又犯す事あるはさらしめむと欲するは故
のこと言ふ者大抵彼の國既に庚午の亂に懲り晉館
倭人彼を終に如何とある事無きを以て我々州を
して嚴しく此を治めしめむと計り姑くかく言へる

のこ

同十一年壬寅明の嘉靖廿一年義晴の公方僧安心東
堂として彼の國に使せらるし時我々國去歲在館倭賊捕
送の事再び三浦倭戸を置くの事及船人を點檢するを
傳むるの事其請ひ有りし也彼の國全安國をして書を
我々州に復せしむ其書左に記す

答對馬島主書

書未就認清迪良用開慰所獻禮物轉啓收了
將土宜正布三匹及今壬寅年例賜米豆各五

拾碩付回使惟領納但審覆辱書了無感戴寵
錫之意及多不遜未滿之語禮失敬順事犯悖
上誠所未喻駭訝殊深念惟貴島之於我朝自
厥先世納款効忠之不懈我朝撫恤不啻若慈
母之愛赤子賈與寵獎之恩彌久彌厚而貴島
之人忘大德背大恩敢煽叛亂罪不容於覆載
固當永與之絕不許復通為緣日本國王專使
來請懇懇不已隣好之義難於固拒龜勉副役
情逆之徒縱許容實恩接之典理難如舊裁損

其制立為約條固為永世遵守不得撓改貴島
苟念前日之所為如何我朝之寬貸如何則自
當感幸踴躍之不暇敢復濫有所望哉况庚午
叛亂專由三浦居後之故雖萬世不可更許貴
島固不得並與他事而出諸口筆諸書也若此
事轉啓為難未敢承教前人則已矣自是下主
島而未改其前轍殫盡忠款無異先世之為者
國家嘉美恩待有加是下苟能効忠不已功懋
績果則褒異之典自有新命何用規也
以已棄

之舊例為請乎去歲捕送罪倭之事益見是下
知忠之實國家嘉悅畧有恩賚物雖不腆獎寵
之意未為不寓於其中凡在下之道承恩於上
物雖微細榮則重矣固當淪肌知感戴祝無已
是下荷上寵賜未為不優不但不自榮感而反
多慢語是何意也貴島雖僻在海中素不習於
詩書義理之訓豈無賢知之人知禮義之所在
而迺至於此乎夫事上之禮我雖無眾上以為
非而譴責於我則引咎於己深懷畏懼上以為

是而褒獎於我則不有其功自謙不居足下捕
送罪倭忠則美矣國家亦以盡知而施獎典矣
然在足下則職分所當為也一度上達俾朝廷
知之足矣何必重復誇言而不置乎且夫去歲
罪倭雖皆其自犯不干於足下然島中居人厥
數有限足下苟能檢攝於平日有所犯料隨其
所聞一一繩治則彼奸濫之輩如金老古延時
羅等害人作孽何敢若此之縱恣乎管下之人
作奸於我國足下縱曰不知律以聖人席亮出

柙之訓則責亦不得不歸於足下矣非以足下
為身實有愆也此之不思而乃曰我何作舊之
失乎殊無引咎自當之意恐不合於事上之禮
也足下其更思之貴島先世恪事我國之時如
有獎勵重事或遣朝臣此固出於先朝恩數之
優視島主忠否而行之初非恆式庚午之歲亦
遣朝臣于貴島到浦將發值捕倭叛亂未達而
返實由貴島之犯順而此禮遂廢耳足下忠順
茂著則先世之禮豈無講行之時祇在足下勉

蹈先世之忠而已去歲奸濫之發非特罪在倭
人我國奸商潛相交通引惹為隱藏匿倭物而
不許者相應有之前因貴使書告轉啓于上發
遣京官究極搜捕而貴使書音之名多與我國
人名不同搏其欵似記鞫甚嚴備不得實獄事
蔓延熒於赦下者甚衆貴島之人難與面質不
得正犯至今獄事未竟深以未獲罪人而致辟
為慮足下其悉此意且足下居諸島要衝也地
防過舉竊使我邊得以無虞我國之所以厚於

貴島者不唯字小之仁亦以紀其功也貴島之
倚恃於我國猶赤子之托慈母又何俱於公麼
之海賊乎且審來書別幅歷舉去年新立約條
中有未便於來倭者為言足下是言亦不為過
凡日本與貴島朝聘於我者非徒輸誠納欵或
因以交通有無資以生活何異於我赤子以王
者一視無外之仁惟欲盡我換字接護之恩耳
豈欲故為拘束可厭之事乎但來朝之人及格
倭之類豈可保其盡為良善者有如去歲奸狡

之後難於其間而不復防禁恣其所為無異前
日則憑依漁釣採薪却掠於海浦或潛結奸商
昏夜於閭閻以致毆鬪賊殺欺奪物貨或托稱
候風竊掠於海島或賊艘混於聘船而乘乘間
作耗若此等事為害多端惹起釁端兩好不全
則貴島受禍尤重矣故朝廷共議不得已為此
防範約條身暫料之雖若有苦細思之實大有
益兩間和好賴之而久豈但為我國之無虞貴
島與日本永享安利以此言之所為貴島永

固其好矣獨為我也足下特未審料之耳但其
中貴島及日本聘船依舊例尺量後又復照人
者當初慮或有如去歲奸濫絕惡之倭綱漏不
伏其罪潛從聘使而來以致依舊作奸故併入
約條身今因書來更料之足下既能懲罪倭又
能嚴如督察豈復有潛來肆惡者乎况承足下
懇懇之請商量八條之中唯此可改而無甚大
害故具由轉啓許依舊例只尺量船隻不復照
人矣惟希亮察餘冀順序自玉不宣

和文

示に殿恩哉感するの意なく歸つて不満の語多く貴島の
我國における其の先世より忠を以たり相承たらざるを以て我
國の此を我待の又た久しくしてよく厚く志するに貴島
の人其の恩哉忘る敢て叛逆を為に宜しく絶て通せ
ざるを但日本國王使をして専ら請ひ慫慂して
止まらざるを以て姑く此を好むを許せり然も其の接待
の事に至りては理におひて薦の如くしかたし仍る此をを
裁減して立て約條とせり貴島先日のおる處如何と思は

自下此をを感幸する暇有らざるを又降り望む處有
るをいれ也且庚午の變もつり三浦居傳の致を處によ
る時、留傳の事無と言ふとも再た此をを許すす
るに貴島他事と同じく此をを言に發する事ありき
是下島に主たるよりこのかた其の前非を改め忠順を致し
如此くして危殆つむる自から褒獎の事あらむ如何を既に
棄るの舊例を以て更に請ふ事哉もや去歲衆徒を捕
へ送るの事朝廷既に是下の忠を知り仍て又此をを思
賜有り不勝なりと言へとも其の褒異の意無きと有らん

夫も下たるの道恩以上に受るときは其の厚薄と論を
する事なく肌一に淪り感戴し以て止ぬる事なく是下寵
賜を祈ふ事多かるべし然るも今榮感の意無きもの
にありて却て不満の語多きもの如何そや貴島海中
に居て素より詩書義理の訓に習ふべしといふも又賢智
の礼義は知らざるもの無くして爰に至るる且罪倭を捕
送るの事足下に有て言ふ時又職分の為に一き處のみ如何
を重複して此を以て止まざるや又罪倭の事姑く足
下の知る處に有らばと言ふといふも然るも島中の居人其

敷あり有り足下若く能く此を察し其の罪を犯す者
速に此を治め金亮古延時羅等之類は其の人を
害す契戎爲に如此に至る事なきや今此をと思ひ
咎を引き自らの責むるの意なきは上にはうふ所の禮
にあらずらむ貴島前代褒慰の事有る時或は朝
臣遣る此を我國恩遇の厚きより出て又島主の忠
否を見て此を行ふ者あり初めより定式たるに有るや
千年又且て朝臣遣貴島に遣る満々に浦を發せむと
して賊倭を捕ふるの變によつて至らば一歸まり此を

貴島忠順を失ふによりて其の禮終に廢たすのことは下若
忠を致さる先世の如く施行するの時無らむ也且去歲の
事其の罪ひより倭人に有るのみならず我々奸高潜に相
道交し悪我あり倭物を匿して敢て倭人に與へざるに
より以て此くは至るなりと思ふに又此の事有る處一但貴
倫書し告る處の名多く我々國の人名と同しかりに以て
轉啓し京官をして其の疑ひしきを捕へ嚴しく此きを
榜訊に未だ其の犯人を得て此きを罪に致さる此きあ
きたらざる處のみ然も是下諸島の要地に居り寇賊を

防ぎ我々邊として安き事を得せしむ我々國の貴島に存く在る
後に小しきあふ我々字ふの仁のまにあらば實に其の我々國
に功有るを以てして又貴島の我々國におらる彼の赤子の
慈母を頼むら如し今如何そ力を我々國に致されしめて
却る彼の賊類のため心を煩はざるや又去歲新たに
に定むる約條の内倭人に便ある事有るを以て言ふ
夫れ日本及貴島我々國に朝聘する徒に誠をいたし
忠誠盡たのめあらば仍て有無城通し其の生活をたてんる
のためあるときハ王者の仁にあつてはりてふ其の此きり便

あらざる哉。たんに集しむる。但來朝の倭人及格倭に至り盡く其の良善なるは頼むるに若し去歲奸惡の徒の如き有て其の間に難り来り此も其防く事無く。又恐る前日の如きに至らむ。且賊船をして聘使に混れ来り邊害をふり仍て兩國の好みに弊へ有る事を致さ。貴島に有つて禍を受る事尤も重かる。且ゆへを以て朝廷にむかふ。此の約條に立つるの今貴島及日本に聘船既に其の船の大小を尺量し。又其の人数を改むる者。のいさきい言ふ處の旨によるの。然も示はらば。此も

を思ふに是下既に能く眾傳を懲り。又嚴しく此も其察せし自り。如此きの弊一無る。且八條の内唯此事此もを改めて大いに害をなす事あり。よつて轉啓し舊例の如く。但其船を尺量し。人数を點檢するの事を止めて。以て是下の求る處に叶ふのみ。

齋浦の海路が禁し。始て館所を釜山浦に移せ。事天文十三年甲辰の事と見たり。後永祿十年丁卯朝鮮恭憲王我の義榮の公方に復せらる。書に國家深徳甲辰狗鼠之變。熟講兩境安全之策。

審其形勢以固邊圉則齊浦之路安得復開乎
と阿るに據るる其書 山靜院公の所又見へたり
第十七代 長壽院公諱ハ義調讚岐守と稱し候
御時正親町院御宇光源院義輝の公方永祿七八年の比
我々爲船廿五増して三十船に至りし也此事後永祿
丁卯年朝鮮恭憲王我々義榮の公方に復せし書
に詳也其書後に見たり考へ據るる
按二俗に傳ふ 長壽院公の時抽谷盛廣をして爲遣
五十の薦例に復せし事我朝鮮に請ふむ盛廣彼の

國に至り免角し五十船の薦例又復したうと言ふ事有り
據所無き事也後天正九年辛巳明の萬曆九年
昭敬王我々義昭の公方に復せし書に馬島
船隻至加五隻曾不念此願加二十不限大
小多見島主之不知足也と言ふに據て其安
たふ証を登し其書後に見たり其之後慶長
十六年辛辰明の萬曆三十九年壬辰亂後始て
歲船を送らむ時 萬松院公禮曹へ送らむし
書の略に 雀三十船通二十船陋島何以救

民生乎所冀再舉五十船之例以堅固東藩
と有り禮曹各議尹暉の復せし書に五十船舊例
以庚午之作耗而減為參拾若拾舊例又以
壬辰之入寇而減為二拾皆貴島之自取非
我朝之變約也と言ふに并せ據るを

第十八代 山靜院公諱ハ茂尚刑部少輔と稱し候
御時正親町院御宇義榮の公方永祿十年丁卯明の隆
慶元年朝鮮恭憲王我り義榮に復せらるし書
に此より先き我州の歲船五船加へし事載せたり

其の書左に記し

朝鮮國王李恒

奉復

日本國王殿下

比於五年三承貴价誠好之篤鯨濤莫碍感為
厚義但所示之事勢難承教而請之愈勤不止
一再竊恐左右之不思也事或不至大闕而可
以撓改則以吾兩國之無間當一言而決矣何
至曉々往復有若不釋然者乎癸亥之書已盡
其意今不必瀆告庶冀大王渙然而冰如釋也國

家深懲甲辰狗鼠之變熟請兩境安全之策審
其形勢以固邊圉則薺浦之路安得復開乎量
船之尺既刻正統年踰用之又過百年貴國之
人無不自見而詳知則安得謂之新造也馬島
密邇我邊未効捍衛頃年縱賊不救之深固當
見絕而特因大平之教至加歲遣五船德至渥
也尚不知感反以船之大小定限為言島主
之不自量也邇久借兵助寇血我南陲得罪於
先朝久絕於約條五十年間獨不見許者以其

為我國之讐賊也今安得復許乎兩國之信義
雖堅而設隘長筭當謹於萬全舊路今不可復
開也一時之情歎雖至而先王定制不可以增
損舊尺之用安敢改乎施恩有節事當慮後則
船隻之有限不得不爾也文讐非直德不施怨
則邇久之永絕勢所當然也撥之以情參之以
義少無大闕尚大王教之益力未使請之彌厲
是必左右不以實聞而使之疑間於我耳不然
以大王之明睿何至強人以不可為之事乎若

左右既以實聞而大王猶執前意則是寡人無
德可受見疑於奧國深可愧也既知其不可而
猶欲強從則大王有脅持之失寡人虧以直之
道開誠結好者豈如是乎前書想在願大王具
復之章甚且如二十人絕不通好亦在五十年
之前遽即許待固無其名廷臣獻議皆以為不
可第念大王委使屢請而盛久等十二人則其
名字或付於文籍之間其所見絕又不如遐久
久側之比故特許造給圖書依例奉朝曲副大

王至三之望其餘八人者前日之奉朝事跡了
不見於文籍故不得並許奈何餘莫益依舊好
永保終始是兩國之福也不腆土宜具在別幅
並惟照亮隆慶元年六月日

和文

五年の間三たび貴价城承く誠好の厚地感荷にたす
但亦に處の事終に教を承りかたくして大王此きを
請ふ事一再あらん事まゝ大にあらにあらん事
無くむハ我兩國の間と無きを以て一言して決はる

し如何む我往復して止まらざるに至らむ癸亥之書既
に此の意我盡せり願はくハ大王此事を察して渙然と
して氷の如くに釋む事を國家深く甲辰寇賊之甲^按
辰の事今追^{考一からん}變に懲り兩境安全を慮り以て邊界を
固く是の時ハ薺浦の路再び開く處なり凡船我量協の尺
既に正統の年號を刻し此事を用ゆる者今百年に過
たり貴國人詳に去らんと云事無き時ハいつくむ是此
を我新たに造ると言ふるを馬島我邊に近うし
且て彼の海賊の防をもいふに於て却て頃年賊を繼に

し敵^公の罪誠におもと絶つを^然ハ大王の教に由りて
又此より歲遣五船を加ふるに至たる猶其徳を感良る
事無く船の大小其の限りを定むるを以て云ふ事を去た
らむそ島主のこつら量らざる此に至たると也遼久兵我
借し寇を助け我々南邊我亂る罪を先朝に得て久しく
此より約條を絶てり五十年の間其の通る事我許さる
者ハ其の我々國の讐賊たるを以て也今いりむ於又通る
る事我許さるるを兩國の信義誠ニ固くと言ふ^一又
其の要害を設け國我守る又萬全を務むる

きと地を齋浦の舊路今又開く處なり一時相好むの至
きりといへども先王の定制又増減を在りし時舊尺
の用ゆるいつくむを改むるに恩我施に節を以てし
事宜しく後來を慮るべき時に幾船の定限有る然らざる事
を得ざるもの、其難言に及ぶに直に徳を以てし徳に報ゆるに怨
を以てせざる處を時久しく我ら國に絶る勢の
由るに然る處きもの也此をを揆るに情我以てし此事に
急や後に教を以てするに皆然らざる事を得ざるなり也
然るに大王此事を教ゆる事益勉め未使此事を請ふ

事よく勵み此れを左右の人其の實を以て大王に
もふさるるあらむとらるる大王の明を以て人我強
るに其の爲に處らざるの事を以てせむや若し左右
其の實を以て申し大王又既に其の爲に處らざる
我志り我強ひて後かゝるめむといふ、大王に有て人
適るの過ち有り寡人又直にを以て及ぶの道を失
ふなり誠を以てし好むと結ぶ如此くある處らむや且二
十人の如き好むを絶つ事又五十年前に有り今又其の
接待を許しかたし但盛久等十二人其の名字或ひ

ハ文籍之間に見へ又其の通在る事を絶つ避久り類ひこ
あふたよつて大王三度に及ぶの望を以て曲て此をク圖
書我給し例により其の未朝を許に其餘八人ニ至るハ
前日未朝の事文籍にあつて者無し仍而向しく許
たふと得得さるのこ三願ハ益薦好を備め永く始終を保
たまハ誠ニ兩國の福也

ハ按ニ此書隆慶元年の書にして本朝永祿十年
丁卯義榮の公方の御時に當る時ハ此書ニ義榮ニ
復せし書也書内ニ比於五年三承貴休と言へ

るに據るに永祿六年より同一く十年に至る其の
間五年あるを言り六年より八年五月に至るまでハ義輝
之公方にして九年十二月より十年二月までハ義榮の
時に當る時ハ我リ公方の永によつて歳遣五船我加ア
事義輝の時にして大抵永祿七八年間の事と見たり然
る時ハ此書因先大王之教至加歳遣五船と言ふ
至くして大王之教といふ事ハ思ふに此時我リ
州より國王使を渡し義輝の薨逝を秘し三度の國書
何れも義輝の書と爲して遣らむに似たり

永祿年中朝鮮昭敬王我々義榮に復せらるる書高
峰集に見ゆ此より先き恭憲王の時我々遣五船故
加へらるる事船之大小我州を以て定めらるる事及此
時より始て歳遣の尺量と傳めらるる事此書に見たり
考として左に記す

按隆慶元年六月恭憲王薨し昭敬王即位此書
年月の考ふるべき事一と言へども書内に孤以寡昧叨
承先王丕緒專使過海來致賀幣の語を據る
時大抵我永祿十年十一年明の隆慶元年二

年の間よりして山靜院の御時に當りて知るる
倭書契條各

孤以寡昧叨承先王丕緒夙夜祇懼不敢違寧
乃蒙大王專使過海來致賀幣感哉不能勝適
來信使踵至深寄委曲倭好之意可謂無間慰
幸實多但所示事皆我先王已定之制在皇考
所不敢輕改矧予小子安敢不遵而改之乎大
抵二十二人之給圖書固為無名而我先王重
違大王之請或因身舊有圖書或取其名付簿

籍改給圖書並許接待鄰邦之所待於大王者
不可謂不盡而大王之所施於彼輩亦已勤矣
今茲八人則我國書籍不見有接待之名雖大
王之不我欺而鄰邦典故又豈可盡棄乎且彼
皆大王之臣其命係於大王大王苟能綏之以
德震之以威豈不能革其奸心而防其為變乎
苟或不然雖鄰邦之有恩命庸足恃乎前既給
二十二人圖書亦皆盡心於我國矣豈不足以
禁八人之為非乎如曰二十二人不足以禁八

人則雖盡許之亦豈無海面難制之賊乎鄰邦
大小之議則亦有在矣為國以禮交隣以義禮
義之不愆則雖有意外之患君子不以為患也
也固不可怵於利害而棄禮義之大防又不可
安於一時之姑息而在施無名之章符也以此
之故貴使之來非止一再而竟不得捲之也若
蕭浦開路事弊邦患海賊之竊發軫藩籬之不
固創置重鎮防遏境上以圖萬世之安近日兩
國之間猜嫌不起邊圉永清夫豈小補哉若使

漁採之民舟交島嶼而或有鐵芥違言則非兩
境安全久遠之策也貴國常以來船風浪之害
為言此不思之甚也經涉大洋其遭風浪也多
矣苟人謀之先審而有以處之則亦可以利涉
矣豈有彼此之可擇乎况風浪之害固不常有
而設鎮保境乃萬世之策豈可以不常有之患
而壞萬世之策乎對馬島歲遣船事先王特以
貴國之故盪滌其往咎而獎勸其善意既為之
加五隻復令自定其大中小弊邦之待馬島亦

無以加矣所當感戴之不暇而每憑大王之使
冀遂一己之利害不自知其當止此豈敢信締
好之義而弊邦已定之規亦不可頻改也船尺
非造於庚午之後乃造於大明正統十三年字
樣刻在尺面非可證也先王所制之尺今不可
裁恐增字損第念船大妨於利涉貴國之懇亦
不可每違故自今勿用尺量只令對馬島主任
其騎坐之大中小明錄於文引給付出來則當
考其文引而待之此則寡人敬重大王表以異

數之報也望大王之更勵諸臣益篤前好萬世
無替兩國之幸也交隣之道在於信義不可以
利動不可以威迫利動則傷義而興怨威迫則
虧信而邀禍大王必不為忍唱詩張輕棄信義
寡人亦安敢以利誘威壓而愆永世之好哉凡
此云々皆肝鬲之要也惟大王察焉古人論兵
以直為壯假有漂洋送死之賊寡人之邊吏已
聞命矣豈敢貽憂於大王乎大王不忘先王之
遺言累書累使所以勤々懇々於弊邦者至矣

寡人寧不知感只以所請數事不過為臣子求
便之許恐非貴國先王所以通好之本意也至
欲以陳情之從違而決通好之去就則非所望
於大王之高義也通好不絕萬世永保非專為
弊邦之計而墜先訓失隣和亦非大王之利也
惟大王察之不腆土宜具在別幅并惟照領

和文

寡人不德是以てきたりに先王の緒世承く夙夜に慎み恐
る處にて大王使を専らに海を越へ来りて其の賀を

致さる誠ニ感幸の事也且邇來を以て信使をして委
曲に示し及さる其の好むを修むるの意間ふとをなす但
示さる慶の事皆契邦既に定むるの制度にして我皇考
に敬て又軽く改めざる慶也予小子に於ておや大抵二
十二人の圖書を給ふ既に據り所無しといふ唯契邦
貴國の請ひに違ふ事を重む其の或ハ圖書有りとい
ハ其の名を取つて圖書を改め給へ接待を許さむ我
國大王の爲に意と盡きたと言ふ也今示し慶の八
人ニ至りてハ我國の書籍其の接待の名有ると聞ケル

誠ニ大王の我を欺くにあらざるを知ると以て然りと我
國の書籍又盡く其の據り所無しといふも亦や且彼の
輩皆大王の臣のみ大王若く能く此を去つるに徳我
以て此を伐たるとに威を以てせを其奸心を革め
變を爲た伐防くたとあたえざるや若く然る事無く
むいたとハ弊邦の恩命有りと言ふともいつて其の海
賊を爲さるるとも也たむ且きた二十二人既に此より國
書を給せり此皆我々國の爲めに心を盡す者也然も
其の八人の非我爲にを禁さる不足ら月といハ今

多とひ盡く此より圖書を許れと言ふも又更に海面
制し難きの賊無うるをばもや夫も隣に交り國を治む
るいなくも其の禮義をばやまの事無くして意外の變
有るより君子の患ひざる處也わを以て終に教地所
由ふと不能のを齋浦海路の事弊邦先れ海賊の潜
に發するを患ひ始て重鎮を置き邊境を防ぎ以て
兩國安全の久遠考慮のを今貴國海路の便を以て
いふと我爲はとていへとも又其の船を行るの道に精
くあらかしめ其の風浪の變を料らばあむる必だし

獨り齋浦の海路にて然して後に便ありとせむ也且風浪の
害ハ常に有らして鎮を設け境を保つ萬世の策也
いらんを常にあらさ海の害を以て萬世の策を壞するを
りも對馬島歲遣船の事貴國の命を以て弊邦既ニ此を
り五船を加へ又船の大小彼を以て三つあり此を定
めし馬島に有つて其の感戴するのいとま有らざる
をし然るに又大王の使に憑り常に其の利心城遂む
こと我計る其のあき多るををあらさるかとのあし
今既に定むるの舊例又志しく改むるを承り且船尺

の事弊邦うつて正統十三年に有つて造るときは今又
此事を改むる事なれども但教わるとに船の制大なるは船を
行ふに便あらむと言ふ故に其の事とある處盡く
に違ふを以て今よりして其の尺量を用ふる事無
く對馬島主として其の船の大小明らうに此事を文
引に記し以て給へ来りぬ其の船の大小文引の
言ふ處に依て此事を接待に厚し此も寡人大王を敬
重するの意あり大抵隣交の道信義に有るの事其も
利を以て導きむき威を以て迫ら永世の好む事あり

なりわや教ゆる處意外海賊を以たはよ有らぬ宜しく人
きを誅するに其の意寡人既にわけて此事を邊吏に
命したり幸に大王此事を以て我國の爲めに憂ひと
する事あり今貴州先王の遺言を忘る事なく一
志以て使をして懇懇をいたさる寡人より有つて誠
感する處ありわや但請ふ處の數事皆其の臣子の爲めに
便宜を求むるの意に過らぬ貴國先王好む事と通せ
らるる事あり其の意にあらざる事と其の教ゆる處に従ふ
と後らざる事とを以て兩國通好の事を決せむと

言ふに至てハ恐クハ大王のいふ所もとのみあらざるに似たるのミ大も好むと通し久しくして絶へざるものハ獨り弊邦の爲めは有らざるに有らざる其の遺訓を捨て隣和を失ふ又終に大國の利にあらずらむねふに大王此見を察せむ
第二十代 萬松院公諱ハ昭景と稱し候御時ハ親町院御宇義昭の公方天正九年辛巳明の萬曆九年朝鮮昭敬王我り義昭の公方に復せらるる書に明國に使を遣ふの事ねよひ五十船の着き復し且船の大小

を限らざるの請ひ彼の國終に此見を許さるるの事此

を見載せたり其の書左に記

格ニ貢路の事我朝鮮(古)事此時より始て見(左)

朝鮮國王李昭奉復

日本國王殿下

鯨濤重阻瞻邇良勤茲蒙專价過海深寄委曲感荷不自勝書中縷々備悉盛意但事理有難副者謹條如左幸大王諒察焉大王畏天時保傾心事大甚感甚盛然朝聘以時禮當自控豈待隣國爲之先容况天威咫尺義無私交難欲轉奏亦且無

辭理有不可勢亦難為願大王察之八人之名書
籍無微其中源義亦涉疑似只以大王厚望終不
可孤曾給函書以敷鄰好不可援比並許七人累
承盛諭猶不敢承者有由然矣量船有尺摩自正
統標在尺面人所共見准尺引繩量其大小實取
其便非有他意今日新尺起於庚子繩索准於新
尺深恐未得其實也弊却所守只是舊規盛喻云
云乃及致疑甚非兩國相好情義交孚之道也卜
駟之定事在先朝今在後嗣不可容議至於斤數

載在國典行用已久中間有司不體法意任其自
為載物太重牛馬顛斃民不堪苦寡人聞之惕然
特令申明而已非有新例起於今日國雖有疆界
民莫非同胞大王有聞亦必勤念於斯矣齊浦開
路彼此俱病當初裁斷寔有深意今若一毀其防
易生疑嫌引惹事端其為鄰好之害不既多乎馬
島船隻至加其五大中居多其待馬島德至渥也
曾不念此每憑貴休屢勤德音願如二十不限大
小多見島主之不知足也大抵交際之道信義而

已者為約條導而勿失所以敦信義也若因一時
之見一人之說輒撓而輕改之則是終々無定信
義俱失何用約條為哉茲者未副數事之教乃所
以守兩國之約也其守兩國之約乃所以全兩國
之好也又知大王之意只在於守兩國之約全兩
國之好而區々六事之從違曾不足為鄰好之輕
重敢畫布之惟大王亮之不腆土宜具在列幅并
惟照領餘冀順時珍耆不宣萬曆九年五月日

和文

爰に專使を蒙り仍て盛意我悉に但をす内々慶の事其
の求に副ひかたまきもの有り夫は使を中國に通せらる
乃事此は禮に有つた自からうつた一求めらるる
慶にして隣國をして此を達せしむるを待たるる也
此を轉奏せむと欲はるる一とを理に托して為し加た
し且示はとある八人の事其名我々書籍に見つる源
義又疑ふるまことなるといへと大王の厚望我々つて
且て此より圖書を給し以て隣好我敦くせり今此を以
例して七人を許はる事を得ざる者其の由有つて然る

のこ船天の事正統庚午の年、始り記して尺面有り今其の
天に准し繩索を造り以て船の大小を量る者ハ只其の
便宜たるによるのこ九弊邦の成る所皆此を舊規にして
盛諭總に此より疑ひをいたさる唯大王其の實を悉に
事あらむ事を慮るのこト駭の事其の數先朝の定む
る處にして斤數に至りて又載せて國典に有り其の後
事を營するより法意を知る事なく其使人の成る所に任せ物
を載る事甚だ重く牛馬顛を死し民其苦に絶を
依て命して舊式の如くあらむるのこ今新法に此例

を設くる有るに齋浦の海路を開く事始此をを閉
つるの事實深意有り今若し其防をやがり依て事端
引起さハ終に隣好の害たらむのこ馬島歲船の事
既に此より五船を加へ又船の大中あるもの其の數小
船より多し馬島其德意を感ず此心無く常に
大王の教を勞し又二十船を加へ且其船の大小を限らざる
む事を求む誠に島主の足る事を志らざるを見るのこ大
抵隣好の事信義を以て本とした約條を定め此を守り
永く失ふ事なきハ此を信義を敷く也今姑く一時の

見る處一人の説によつて輕しく此を改むるときハ既に信
義を失し且初より其約條を立てざるに比し唯大王の
意兩國其約を守り好むを全く在りたる事を知る今此
事の従ふと従ふいさゝ誠に隣好の誠意をなすべくとせよ
つて此意を悉くのこす
此年十月昭敬王同しき公方に復せらるし書京極殿
圖書の事を載せたり其書左に記す
朝鮮國王李昭奉復
日本國王殿下

使价之来遠辱惠書憑審動靜康勝良用感慰且
悉貴國為京極殿請給銅印大王為晴廣之意勤
矣第念我先王因貴國書契畿内諸殿使送人等
多有詐偽造送牙符十部于貴國諸使往來特以
為驗則絕中間姦濫之弊伸兩國信義之孚者一
牙符足矣不必贅以銅印也然而重違大王勤請
之意茲命有司造了銅印一顆給付來使誠以弊
邦重交隣之大義且不敢孤大王之教故也但自
今以後本殿或不念兩國相信之美意徒以得印

為幸不棄諸大王而往來自由則今日大王之請
適足以啓後系之弊而實非兩國之本意也惟大
王諒之餘祝順時萬福不宣萬曆九年十一月日

和文

使价の来は遠く惠書を承く仍て貴國京極殿の
為めに其の銅印を求むるの意此を悉せり大王の時廣く
為めに是に至り梅子時廣は此を京極殿の名あるに似たり我先王貴國の
書契に於て箆内諸殿使の送人等多く詐偽有る
を以て牙符十箇を造り貴國送り其の諸使の来

往此を手持し驗とあせしむるに約せし時ハ此も又更
に銅印を用ひ置きた然も大王の勤請に違ふ事を重し
有司をして銅印一顆を造り以て来使に附た此を交鄰
の間敢て大王の教や處に背りたるの意也但京極殿此
之意を念ふ事無く其の銅印を得たるを以て幸也と
心にまりせ使を遣る事あらハ今大王の請ひをして
後來の弊をひらけむる也此を察せ玉
梅子此の數書の言ふ處久源義久事二十餘人
圖書の事其の餘に事何をも公方より此を

請ひ求めらるるにあらざるに似たり又此等
圖書を給へて其の海賊の防ぎを策するを
言ふに至りては彼國の怪しきを致す誠
に宜あり
大抵以前の事考ふるに多し
又按て方長老の記に昔日本國より渡さる使船を
國王殿と號し又管領の使船有り印船とい九州
並に中國四國の守護あり渡すものを言ふ此船を大
間以前まで大間対馬より私に調へ渡り所務在
り也國王殿は彼の國より信使を渡せし其謝禮に必

は渡す又信使と云ふ時を渡さる也三年二回五年
に一回古来より約條也此船渡らるる信使を渡す
事おもにあり頃年まで對馬より私に渡して日本國
王の命を傳ふ昔は使船皆上京を其滯留の日限も
定まらば所務商賈以下求むる所皆時に隨て相
叶ふ也と有るに據る時公方家の時御所丸を遣り
圖書を渡し我州の訃を朝鮮に通せし事必し
も其度毎に公方へおせしめてあらざりしやん
是國王使の事京都將軍家譜及び善隣國寶

記等の書にあらはれざるものハ今皆考識するに
又按方長老の記に國王殿と言ハ古ハ禁中より
三年一回渡さる今ハ將軍家の天下あれと朝
鮮國王日本國王の臣將軍と通書ハ其義にあら
ざるハ將軍を日本國王と書あり公方管領以下
ハ禮曹の書ありと有るに據るに以前ハ將軍家
の使船ヲ國王殿といひあり

又按故事撮要ニ國王使每一起上京二十五
人接見一次若不行則命禮曹設行以正一品

官押宴又云國王島山大内三殿不限年次来
朝又云舊例日本書契内別幅所録之物只土
宜少許有時所求者大藏經而已其差来使副
官船主侍奉等各私有進上隨其所進多少而
量加酬賜未嘗有定規然而進上漸多國計滋
耗弘治甲寅歲戶曹啓成廟令邊將諭来使以
人臣無私獻之義其所私進一切不許其後七
八年間國使絶不来至辛酉歲周般西堂等出
来國王別幅内始稱賣物然其數不多而本國

於卷書内不載許質與否周般等亦不爭詰甲子歲國使二起並未其書契別幅亦有賣物而名般不多本國適因華使之來將二起倭使刻日送回卷書内略不論賣物之事至正德庚午有三浦之倭變朔中來請和其所賣國王別幅内改賣物之賣字作商字而名種甚多朝廷既不許和慮其有怨始許質其所謂商物袋盡自此以後每行必別錄物目謂之商物稍不滿意則輒發詔怒冀使本國不得已而彊從之遂為

無窮之弊云々明之弘治七年甲寅我々國明應三年也我州 達磨院公の御時にあたきり辛酉を明の弘治十四年にして我々文龜元年にあたり我州同くは公の御時也甲子を明の弘治十七年我々永正元年にして我州同くは公の御時にあたり明の正徳庚午は我々永正七年にして我州 龍源院公の御時也此年三浦の亂有り也國王使の事其かくの如く以て彼國甚た此事を厭ひしを察はる

